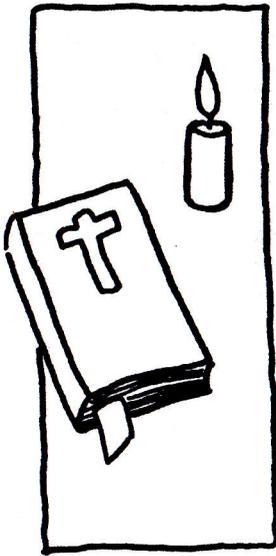


キリスト教入門講座で

学びたい(その三)

土屋 至



● イエス・キリストとの出会い

入門講座の第二ステージは「イエス・キリストとの出会い」をテーマとして、聖書を読む。

まず各集いのテーマをあげることから始めよう。

① 現代人がキリストと出会う ② イエスと出会った人たち——憎まれ者がイエスと出会う

③ ナザレのイエス ④ イエスの説いた「神の国」

⑤ 祈りについて ⑥ 祈りが私を自由にする ⑦ 主の祈り

⑧ イエスの愛の教え——よきサマリア人 ⑨ イエスの愛の教え——放蕩息子 ⑩ エロスとアガペ

⑪ 女たちのイエス ⑫ イエスの弟子たち——ペトロ

⑬ イエスの弟子たち——ヨハネ、トマス ⑭ イエスの弟子たち——ユダ ⑮ マリア——神の母 ⑯ イエスの

受難と十字架上の死 ⑰ イエスの復活 ⑱ 使徒たちの宣教 ⑲ 四人の「福音」の記者たち ⑳ 旧約聖書とそ

の時代 ㉑ 二つの「天地創造」 ㉒ 洪水

㉓ アブラハムの生涯 ㉔ 族长物語 ㉕ ヤコブとエサウ

㉖ ヨセフ物語 ㉗ モーゼとエジプト ㉘ ダビデ

㉙ ルツ ㉚ 預言者たち——その一

㉛ 預言者たち——その二 ㉜ ヨナとヨブ ㉝ 詩編を読む

㉞ 預言者たち——その二 ㉟ ヨナとヨブ ㊱ 詩編を読む

㊲ 預言者たち——その二 ㊳ ヨナとヨブ ㊴ 詩編を読む

㊵ 預言者たち——その二 ㊶ ヨナとヨブ ㊷ 詩編を読む

この項目を見てどう思われるだろうか？ まず気がつくことは旧約が多いということだろう。旧約は洗礼を受けたあと、体系的に学ぶチャンスは少ない。だから入門講座で丹念に読みたいたいと思うのである。

このコースでは聖書に親しむことを第一の主眼としている。聖書のおもしろさ、奥深さに接し、読むたびに新しいことを発見する体験をすることである。聖書の「正しい」解釈を知り、そこから教えや道徳の原理を導きだそうとするような「聖書研究会」的な読み方を主眼とはしていない。だから、その聖書を初めて読むのでの第一印象を分かち合うことから始めることにしている。実際にいくつかのテーマを拾ってその例を示すことにしよう。

●「イエスと出会った人たち」

イエスと出会い、そして生き方を変えた人をここでは紹介する。

まず、聖書を離れて自分の生涯の中で自分を変えた出会いについて思い起こしてみる。どんな出会いが自分を変えたかを出し合ってみる。

そして次に聖書を読む。だいたい一回の集いで読む

の例はこの説明の仕方では納得がいくが、最初のペトロらに対する召命には当てはまらないのではないかとも思う。つまり、この聖書の読み方では聖書の箇所を選択が大切なのである。たとえば「百人隊長」の例(マタイ8・5-13)がこのテーマにより沿ったものかもしれない。

これを書いていて気がついたことだが、「あなたの信仰があなたを救った」とイエスがいわれたところだけ拾って読みながら、イエスの「信仰」についての考えを思いめぐらすのもいいかもしれない。

●「E.T.の説教」と「平地の説教」

④の「イエスの説いた神の国」ではマタイの「山上の説教」をまず取りあげる。

このときは英語の聖書も含めて、できるだけいろいろな訳の聖書を読み比べることにする。たとえば「心の貧しい人は幸いである」の「心の貧しい人」をどう訳しているのか、その訳の違いを見るだけでも興味深い。どの訳が一番心に響くのか、そこを皆で分かち合う。

さらに興味深いのは、マタイの「山上の説教」とル

箇所は四カ所であろう。あまり細かい言葉の解釈や状況説明は必要ない。ここでは次の四カ所を選んで読む。

ペトロやヤコブ、ヨハネたちへの召命の場面(ルカ5・1-11)、マタイの召命(ルカ5・27-32)、そしてザアカイ(ルカ19・1-10)、サマリアの女(ヨハネ4・1-30)を読む。イエスと出会った彼らは、イエスをどう見たのか。なぜ彼らはイエスに魅力を感じたのか。そしてなぜ、どのように彼らは生き方を変えたのかを想像する。そこに共通点があることにも気づいていく。ここでは違いよりも共通点が大事であろう。

結構いろいろな考えが生まれる。マタイ、ザアカイ、サマリアの女の中には、自分の本当にしたい生き方と異なった生き方をしていて、それが後ろめたさや意地や強がりとなって表れ、人から嫌われていた。

イエスは決してそれを嫌わず、かえって自分に注目し、周りの人に得意になれるように接してくれた。それでうれしくなって調子に乗りすぎて、ますますわかりからひんしゆくを買ったが、イエスはそれをとても高く評価していた。けれどもこの接し方は、特にファリサイ人たちがイエスを攻撃する材料になる。

このテーマでは、マタイ、ザアカイ、サマリアの女

カの「平地の説教」との読み比べである。イエスが本当は何をどう語ったのかは知るべくもないが、ここはマタイとルカという二人の福音記者の置かれた立場や性格、あるいは考え方の違いを想像してみる。マタイはユダヤ独立戦争で廃墟となったエルサレムでユダヤ人たちを対象として福音書を書いたとされている。ルカはギリシャ語を話すディアスポラのユダヤ人や旧約をほとんど知らない外国人を対象に書かれたという。

実際に、貧しい人、飢えている人、泣いている人、対象に語りかけているのはどちらなのであるか。あるいは平和を欲し、迫害にあう立場にいた人に語りかけているのはどちらであろうか。

●「放蕩息子」

イエスの「愛の教え」のなかで「放蕩息子」をどう読んだらいいだろうか。これもいろいろな読み方があるだろう。

なぜ「よきサマリア人」や「マルタとマリア」そしてこの「放蕩息子」の話がルカだけにしか載っていないのかということも不思議である。言えることは、ルカはストーリー(物語)性のある短い話が実にうまい

ということであろうか。マリアのお告げやイエス誕生の話を始め、イエスとともに十字架刑に処せられた二人の盗賊たちの話、エマオでの弟子たちなどルカにしかない短いストーリーがいくつもある。

さて「放蕩息子」である。私が試みた「入門講座」や「宗教」の授業で最も盛り上がったのは、その場面の登場人物の一人を選んで、その日の「日記」を書くという作業をしてみることであった。自由に登場人物を選んで書くようにいうと、女子中学生たちは過半が「兄の日記」を書く。おもしろいのは「召使いの日記」であった。これには客観的視点にたちながらも、それを書く人の気持ちがよく表れる。

入門講座では、できたら二人の日記を書き、そのうちのひとりは「弟のその日の日記」にすることをすすめる。弟の立場に立つて書くと「父親」の愛の深さを身にしみて感じるのである。

●——マリア

マリアを取りあげるときの導入はビートルズがいい。ビートルズの「レット・イット・ビー」の音楽とその英語の歌詞と日本語の訳を準備する。「レット・イット

ト・ビー」がなぜ「知恵の言葉」なのかを読みとるために、お告げの場面の英語の聖書も用意するとよい。あるいは上々颱風ウツツフウというバンドグループが歌う、邦訳の「レット・イット・ビー」も、個人的には結構気に入っている。この訳は「いつでも神さまが見つけているよ」というようなものになっている。

そして改めてルカの「お告げの場面」や「エリザベト訪問」の場面を読んでみる。私たちが伝統的にこのマリアの「フィアットなれかし」から読みとるのは、マリアの従順さや敬虔さであるだろう。でもこのビートルズや上々颱風の歌を聴いた後にこの場面を読んだとき、ある人が「マリアさまは案外もつとおおらかに楽天的に骨太に自由に『神さまのいわれることだから何とかなるさ』くらいの気持ちだったのかもしれない」と言ったのが印象に残っている。

マリアが登場する聖書の場面を拾って、そこを読みあわせながら、マリアの性格、考え方、生い立ちを推察してみると、マリアの魅力がきわだってくる。私たちが身につけている伝統的なマリアの姿とはちよつと異なった女性像が描かれてくるのではないか。

ミステリーの女王アガサ・クリステイーの短編に

ずに書いたもののほうが抵抗なく、かつ面白い。

実はこのようなネタ探しが、勝負どころなのかもしれない。幸い、私にはこのようなネタをかぎわけける独特の嗅覚が備わっているようである。といっても私がオリジナルで作ったネタなどほとんどない。本を読んでヒントを得たものも多いが、その本も皆誰かから薦められたり、教えられたものであるに過ぎない。

入門講座の受講者や私の授業を受けている生徒は、そのような意味で貴重な情報源である。また同じように苦労している入門講座や「宗教」の授業の担当者たちとの「分かち合い」からも、多くのヒントを得ている。私の入門講座はそのような受講者や生徒や担当者との共同作業なのである。

「福音」という情報は、「与えること」によって与えられる。「知られれば知られるほどに価値を生み出し」「福音が福音を呼ぶ」というフランシスコ的原理を本質的にもつものであるらしい。

〔次号につづく〕

（つちや・いたる／清泉女学院中学・高等学校教諭）

『ベツレヘムの星』（中村能三訳 早川書房）というマリアを主人公とした作品がある。マリアは「天使」からこの子の将来のいくつかの場面を見させられる。ミステリー仕掛けで最後に「どんでんがえし」があるのだが、このマリアもいい。

●——紹介したい場面はやまほどあるが

「イエスの復活をどう教えるのか」についても取りあげたいし、旧約の場面の取りあげ方についても、試行錯誤を繰り返してきたあげくの「苦勞の産物」も恥ずかしながら紹介してみたいが、それはまたの機会に譲りたい。

私が一番気に入っているのは「女たちのイエス」という「集い」、あるいは「授業」である（本誌一九九七年二月号、土屋至「学校でキリストをどう語るか」参照）。

これは私の好みなのだが、中学生と聖書を読むときも入門講座でも、参考資料として取りあげるの、でさるだけ宗教くさくない方がいいと思っている。聖書の読み方や解釈にしても、キリスト者が信仰者として書いたり、あるいは聖書学者がそれらしく書いたものよりも、そうでない人が自由に「宗教くささ」を持た